

水の哲学

老子

「上善は水の如し」

老子は紀元前5世紀頃の中国・春秋時代の思想家。万物の存在を規定する原理は「道」とであると説き、いわゆる道教の開祖として崇められる。

老子のいう「道」は哲学的な概念であり、さまざまに解釈されている。一般的には人為を廃して自然に振る舞う＜無為自然＞の思想と受け止められている。西欧でも「道」＝タオの思想はタオイズムとして受容され、自然哲学の流派としてニューサイエンスと呼ばれる一部の科学者にも影響を与えた。

水は万物を利し、しかも争わず

「上善は水の如し」は老子のもっとも有名な言葉として引用されることが多い。

上善若水。
水善利万物、而不浄。
処衆人之所惡。
故幾於道。
居善地、心善淵、与善仁、
言善信、正善治、
事善能、動善時。
夫唯不浄、故無尤。



上善は水の如し。
水は万物を善く利し、しかも争わず。
衆人の悪とする所に在る。
故に道に近し。
居は地を善しとし、心は淵を善しとし、
与うるは仁を善しとし、言は信を善しとし、
政は治を善しとし、事は能を善しとし、
動は時を善しとする。
それただ争わず、故にとがめなし。

最上の善は水のようなものだ。
水は万物に利益を与え、しかも争おうとしない。
それどころか人々が避ける場所にいる。

だからもっとも道に近い。
大地を潤す水のように、心は澄んだ淵のように、
人々に愛を与え、信頼のある言動で、
正しいまつりごとに努め、能力を活かして働き、
決して時間を無駄にしない。
このように水は争わず、
誰かにとがめられることもない。

人の道としての水

この「上善は水の如し」では「水」が「道」とほぼ等値されている。上善とは最善の生きかたといってもいい。

ちょっと補足しておく、人々が避ける水のある場所とは低い土地にある目立たない場所のような意味だ。人間は水なしに存在していけないけれど、日常生活ではそんなことを意識せずに気楽に水を飲んでいる。逆にいうと水に生かされていながら、水は生かしているという主張をすることがない。

ここには老子が水にたとえて謙譲を美德としていることがよく示されている。老子が善とするのはスタンドプレーではなく「縁の下力持ち」のような存在だ。そして実際に頼りになるのは後者のような存在にほかならない。

ちなみに道教には水のように柔軟なものを鉄のように硬質なものより強いものと見做す視点が根底にある。どんな名刀も水のなかではまるで無力



だ。柔道でいう「柔よく剛を制す」とはこうした道教的発想を受け継いでいる。

謙譲・非戦・慈愛の象徴に

水のような生きかたこそ最善の道と説く老子哲学のもうひとつのポイントは「水は万物に利益を与え、しかも争おうとしない」ということだ。老子が生きた春秋時代はいわば群雄割拠の戦国時代だった。荒廃した大地に立って老子は争うことの無意味さ、虚しさ、哀しさを痛感したのかもしれない。それは水に託した＜非戦＞の思想と読み解くこともできる。

老子に心酔している政治評論家の森田実は書物としての『老子』を現代にも通じる「政治倫理書」と見做している。たしかに老子には「大国は下流となり、へりくだるべきだ」といった政治的覇権主義を戒める言葉も少なくない。

万物の源である水を謙譲や非戦や慈愛の象徴としている老子哲学は智慧の泉だ。いまも枯れることなく脈々と湧きつづけている。(高倉)

参考文献

- 『中国の思想』 徳間書店
- 『中国古典選』 朝日新聞社
- 『老子』 中公文庫
- 『中国の古代哲学』 講談社学術文庫
- 『老子—無知無欲のすすめ』 講談社学術文庫